

平成 2 8 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成 2 8 年 4 月～平成 2 9 年 3 月

1. 学校概要

学校名 宮城県角田市立東根小学校

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ()

所在地 〒981-1533
宮城県角田市平貫字前河 2

E-mail higashine-es@kakuda-c.ed.jp

Website //www.kakuda-c.ed.jp/higashine-es/

児童生徒数 男子 11 名 女子 25 名 合計 36 名
 児童・生徒の年齢 7 歳～ 12 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☒ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☒ 平和・人権
- ☒ 環境
- ☐ 気候変動
- ☒ 生物多様性
- ☒ エネルギー
- ☒ 防災
- ☒ 食育
- ☒ 伝統文化
- ☒ そのほか（遠隔地小学校との交流<鹿児島県南九州市立手蓑小学校>）

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

校内研究として、“防災教育”に取り組んだので、その内容を以下に示す。
平成28年度校内研究 角田市立東根小学校

研究主題	自分の命を守るために、主体的に行動できる児童の育成
副題	各教科・領域の学習に防災教育副読本を活用した授業実践を通して
研究目標	自分の命を守るために、主体的に行動できる児童を育成するための指導の在り方を各教科・領域の学習に防災教育副読本を活用した授業実践を通して明らかにする。

1 授業研究

ユネスコスクールの教育理念であるE S Dに基づき、防災教育の視点と関連付けた教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動の指導により、児童の防災に関する知識や意識および実践力が高まり、自ら考え判断し行動する児童が育成できる。

○ 成果 ▲ 課題

☆ 授業づくり（①事前検討会・②授業実践・③事後検討会）

低・特支部会

① 事前検討会・授業準備について

○ 事前検討会で話し合うことで、指導内容に深まりが見られた。

② 授業実践について

○ トランプ・カルタを教材に選んだことは、怖さ、恐ろしさをあおることなく大事なことを教えることができた。児童らが教科書からだけではなく、自らの目で防災関係の設備等を探し出してきた時点で意識は高められた。同じものを探し出して、発表で繰り返されても、それが重要（特に設備面）である。

○ 消火器、A E D、ヘルメットなど、身の回りにあるものにしっかり気付くことができた。

➡ 安全を守るものが身の回りにちゃんとあるということが分かることが大切である。

○ 模擬（簡易）避難訓練でA児が「周りに担任がいないときは協力学級の先生を探す。」「職員室に行けたら行く。」「大声を出して助けを求める。」など、実際に災害が起こった際のシミュレーションがそれなりにできたことは、彼の社会性の高さを証明している。

○ 各学年の授業を参観し、児童だけではなく教員の意欲も高まった。

▲ 「～があつてすごい。」「～ができるからすごい。」ではなく、なぜそれがあるのか、何の役に立つのか、災害の時はどのように出して使用するのか・・・など「これがあるから安心して平常は過ごすことができるのだ。」ということ把握させたい。

➡ 教師の発問の工夫が必要

- ▲ 担任がいるときは慌てず指示に従い、いないときは周りの児童の動きに合わせて、また、協力学級の担任、近くにいる大人を探し、むやみに動き回らないように・・・ということをしっかり教える。

中・高部会

① 事前検討会・授業準備について

- 授業づくりに関して部会での検討を行ったことで、授業者の負担軽減につながった。また、事前検討会や事後検討会でも部会の先生のフォローがあった。
- ▲ まだ授業者の負担がぬぐえたとは言えず、チームでつくった感が少ない。

② 授業実践について

- 副読本の活用にとどまらず、写真や動画、児童による実際の活動などが学習効果をさらにアップさせることを実証できた。
- 教科との関わりという点では、6年生理科の授業が大変有効な研修となった。事後検討会での指導主事からの助言では「あくまでも教科のねらいを優先に」との明確な指導があったことも大変有意義であった。
- 7月の学習参観での一斉授業は、児童だけではなく家庭への意識の向上という点でも大変有効であった。

③ 事後検討会について

- 参観の視点を明確にしたことで、事後検討会では共通した内容について検証することができた。
- ▲ 課題の提示や発問の仕方、副読本の活用場面などもう少し深く突っ込んだ話し合いができればよかった。深めるまでに至らなかった。

研究部として

① 事前検討会・授業準備について

- 全体での事前検討会前に各部会を開いて授業づくりを行う形は今年度に限らず、次年度以降も校内研究授業を進めていく上で継続していかなければならない。以下のような流れを確立することが必要である。

☆ 4月段階 授業者は単元の絞り込みを行い、日程を決める。

* 決まった日程は変えない。

☆ 授業予定3週間前をめぐり、1度部会を開く（内容は授業単元と大まかな流れについての授業者からのイメージの交流、指導案作成に関わる分担）。

* この段階では指導案になっていなくてよい。

☆ 授業2週間前には、1回目の部会をもとに指導案を作成。部内で検討する。

☆ 授業1週間前には、全体での事前検討会を開き、参観の視点について話し合う。

☆ 指導案の修正などを行って授業へ

② 授業実践について

- 低学年では、体験的な学習の導入や繰り返し学習の有効性が分かる実践となった。事後検討会でも話題になったように、怖さなどを感じさせるよりも、ゲーム

を取り入れた学習を行うことで、児童に知識の定着が図られた。

- 中高学年は、副読本だけではなく、写真や動画、実物など視覚的に訴える教材の工夫が効果があった。また、教科との関わりにおいては、あくまでも教科の学習の狙いがメインであり、その中でどのように生かせるかを考えた授業を構築していけばよいという方向性が明確になった。

③ 事後検討会について

- 事後検討会で話し合われた内容について、研究だよりの発行などで共通理解を図ることができた。

- ▲ 授業での発問の仕方や課題提示などについての具体的な取組についてはさらに突っ込んだ話し合いができていくと、個々の指導力アップにもつながる。今年度の事後検討会の進め方については研究部として大いに反省しなければならない。

☆ 防災教育年間指導計画の検証と改善

低・特支部会

- やはり月に1度の「きずなの日」は有効である。
- ▲ 45分授業ではきつい内容もある。(持て余すこともある)他の学活の内容が浸食されてしまうことも懸念される。
 - ➡ 時間帯としては、帰りの会、スクールバスまでの待ち時間を利用する。ただしこれも時間によって余裕がない場合があり検討が必要である。

中・高部会

- どの学年も計画的に授業を行うことができた。
- ▲ 実際の授業記録とも照らし合わせ、再度年間指導計画の作成を行わなくてはならない。

研究部として

- 年間指導計画に基づいて計画的に授業が行われた。再度、実際の実践記録と照らし合わせながら、次年度以降も学習がスムーズに行えるように修正を行う。

☆ 防災に関する知識や意識及び実践力の調査

低・特支部会

- 知識や意識は児童も教師もついてきたと感じる。教師については記録に残すということで本気になれたと思う。
- ▲ アンケートはもっと分かりやすいように吟味する必要がある(漠然とした設問はなるべく詳しく明確に表現する。)

中・高部会

- 学習したことを家でも確認しようとする児童が増えてきている(家の備え)。学校での学習が家庭へ広がりを見せている。
- 6年生のパンフレット作りは、学習のまとめとして「発信」を意識できたことが大きな成果と言える。
- ▲ 2年間の成果が見られたことで、今後の継続した取組に向けて確認すべきで

ある。

研究部として

- 5月・1月の児童アンケートの結果からみると、意識や備えについて各学年とも1月の結果ではほとんどの項目で向上が見られたことから、知識や意識及び行動力について成果が上がったと考える。
- ▲ 意識調査などアンケートの項目については、次年度以降も教科に関わらず検討し、実態把握ができるように整備していく（研究教科によっては学力テストの調査なども活用できる）。

2 行動力の育成

日常的に防災教育に関わる場や機会を設定することで、自他の命を大切にし、防災に関して積極的に関わろうとする児童が育成できる。

☆ 防災に関心をもたせる取組（月1回の定期的な防災に関する指導）

低・特支部会

- 毎年1度は水害に遭遇するという、比較的災害に対して意識が高い地域ということで、防災に関心を持たせるにはよかったと思う。
- 児童の実態に合わせた時間で行った。

中・高部会

- 「きずなの日」＝「命を守る」学習が児童に定着した。
- 個人ファイルでワークシートなど取組の足跡が残すことができた。

研究部として

- 毎月11日付近に定期的に実施した「きずなの日」が児童にしっかりと定着した。 ※ きずなの日 ＝ 命を守る学習

☆ 情報を的確に聞くことのできる「聞く力」の育成

低・特支部会

- 本校児童の実態として、正確に情報を聞きとるという力は、防災に限らず全ての学習、生活で必要である。他校よりは優れている感もあるのだが、個人差がある。
- ▲ すずらん学級＜聴覚＞の児童は放送が聞き取れない。担任が検索係になっていたが、これは替えなくてはならない。今年度中に変更し対応できた。

中・高部会

- 緊急放送に対しての反応がよくなっている。また、情報についても正確に聞くことができている。
- 避難訓練の際に内容や放送の音量などについても確認が行われたので、児童にも聞きやすい状況を作ることができた。

研究部として

- 緊急放送に限らず、全教科において「聞く力」は身に付けていかななくてはならないことである。今後も、児童の実態に合わせた取組を行っていききたい。
- ▲ 防災に関しては、聞いた情報から行動に移すことでクリアとなるが、教科の学習においては、聞いたことを理解し、さらに返す（話す）ことが求められる。この点ではまだ東根の児童は「聞く」に留まっていると感じる。

☆ 避難訓練等の改善

低・特支部会

- ▲ 情報に応じてどこに逃げるのか・・・屋上か校庭か外かをはっきりとシミュレーションする。本当に必要性がある場所かどうかをもう一度チェックする。

中・高部会

- 防災主任が常に反省を生かした訓練を行ったおかげで、様々な災害に対しての対応について、児童、職員の動きを確認し動くことができるようになった。
- ▲ 地域連携については、この2年間でのつながりを今後もどのようにしていくか、地域自治体との協力、合議を重ねていく必要がある。

3 目指す児童像 自分の命・周囲の命を大切にする子ども

- 【低学年】 災害時の約束を守り、指示通りに行動して自分の命を守ろうとする子ども
(自助)
- 【中学年】 周囲の人と一緒に行動し、自分の命を守ろうとする子ども
(自助・共助)
- 【高学年】 周囲の人と協力して行動し、自分と周囲の人の命を守ろうとする子ども
(自助・共助・公助)

◎ 具体的な目標と、その成果・課題

	知識・理解	技能・主体的行動	他者との関わり
高学年	様々な災害について発生メカニズムや特徴、避難や応急処置等、対処方法を理解する。	災害発生時の情報に基づいて自ら判断し、安全に行動できるようになる。	自己の安全を確保しながら、家族や友だち、周囲の人々の安全にも配慮することができるようになる。
	【○成果と▲課題】 ○ 教科（理科・社会）の学習と関わらせることでより内容が定着した（単発だとつながりが薄い）。 ○ 教科を通して大まかなことを理解することができた。 ○ パンフレットづくりで対処方法を考えることができ	○ 訓練の様子を見ると、自分で動くことができています。 ○ 家で災害が起こった時の対応や緊急時の避難、連絡方法などを決めている家庭が増えた。 ○ 実際に地震が起きたときなどに学習を生かすことが	○ 自助については意識の向上と共に行動できるようになっている。 ○ 6年生は知ったことを発信しようとい欲的に取り組んでいる（共助につながった）。 ○ 熊本・鳥取地震への思いや

	<p>た。</p> <p>▲ 災害についての知識や避難方法は身に付いたが、応急処置や対処法までには至っていない。</p> <p>▲ 系統性を考えて学ばせることができなかった。</p>	<p>できたようだ。</p> <p>○ パンフレットづくりでは主体的な活動へつながった。</p>	<p>りも広がり、募金なども行うことができた。</p> <p>▲ 5年生はまだ自助段階。6年生の取組を聞かせたい。</p>
	<p>災害発生時における様々な危険と、自然災害に応じた適切な避難の仕方を知る。</p>	<p>災害を回避するために、知識や体験に基づいて安全に行動することができるようになる。</p>	<p>学んだことを家庭で伝えたり、困っている人がいたら家族や友だち、周囲の人々と協力して危険を回避したりすることができるようになる。</p>
中学年	<p>【○成果と▲課題】</p> <p>○ 地震・津波・大雨等の災害時に起こりうる危険を考えることによって理解できた。</p> <p>▲ 適切な身の守り方についても学習段階では理解したが、災害が頻繁に起こることではないので、記憶しているかは不明である。</p>	<p>○ 「わが家の防災マップ」と「地域の防災マップ」づくりを通して、周囲の危険物を意識することができた。災害時に危険な場所へ近づかないようにさせたい。</p> <p>○ 「わが家の防災マップ」を保護者と一緒に考えたことで、保護者の防災意識を向上させることができた。</p>	<p>○ 「わが家の防災マップ」と「地域の防災マップ」づくりを通して、地域の避難所を確認することができた。</p> <p>○ わが家の防災設備を充実させることができた。</p> <p>▲ 3年生はまだ自分のことで精一杯な様子である。</p>
	<p>様々な災害があることや災害に応じた避難の仕方を知る。</p>	<p>近く大人の指示に従い、行動することができるようになる。</p>	<p>基本的な生活習慣を身に付け、自分のことは自分でできるようになる。自分で危険を回避し、大人と連絡ができるようになる。</p>
低学年	<p>【○成果と▲課題】</p> <p>▲ まだ「ただついていっていただけ」の段階なので、自分の身は自分で」を定着させたい。</p>	<p>○ ある程度できている。</p>	<p>○ 縦割り活動がしっかりしているので、初期対応では比較的動けている。</p> <p>▲ 本当の災害の時に、上級生、大人をしっかり見つけ声が出せるか。足音などで流れに合流できるか。初期対応（予告なし）での訓練の工夫である。</p>

研究部として

○▲ 高学年の反省に記載されていた、「系統性を考えて学習することができなかった。」ということが大きな課題となった。今年度、6年生が「見てみて役立つライフセーブ in 東根 action!」を地域に配布するという取り組みを行うことができたが、そのように、各学年のゴール(まとめの具現化)を明確にすることで、学習に系統性をもたせられるのではないかと考える。

◇ 今年度の各学年の取組は以下の通り

- ・ 5・6年生 ⇒ 地域へ向けた発信物の作成
ex: 防災スライドショー
- ・ 3・4年生 ⇒ 家庭への発信物の作成
ex: わが家の防災マップ
- 1・2年生 ⇒ 学校安全マップの作成

4 研究全体の成果と課題について

【成果】 「自分の命を守るために、主体的に行動できる児童の育成するための指導の在り方を各教科・領域の学習に防災教育副読本を活用した授業実践を通して明らかにする。」という目標については、上記の各項目での反省から、毎月のきずなの日の学習を中心にした学習活動により、知識を身に付けるだけではなく、自ら行動し命を守ろうとする児童の育成を図ることができたと言える。また、各学年での授業実践において、副読本「未来への絆」の活用を行い、その学習効果をさらに上げることができた。実際に使用して、副読本の内容が45分の内容なのか、ショート時間でできるものなのかを考えることができたことにより、次年度以降も有効に活用することができる。また、校内だけの取組にとどまらず、家庭、地域にも広がりを見せたことは大きな成果と言ってよい。

【課題】 2年間の取組によって築かれた土台をもとに、今後も命を守る学習「きずなの日」の継続が児童の命、仲間の命、家族の命、地域の方々の命を守る大切な学習となっていく。その学習を今後どのように継続していくかが、次年度からの大きな課題となる。

☆ 外部からの評価

1 H29.1.21(土) 東北大学災害科学国際研究所主催「減災活動報告会」

＜於・東北大学片平キャンパス＞

⇒ 6年生による実践発表「見てみて役立つライフセーブ in 東根 action！」
 ≪地域に配付した“防災パンフレット”の紹介≫



2 H29.2.4(土) 第11回 J A みやぎ仙南めぐりキッズ農業体験活動かべ新聞コンクール
 <於・蔵王町ふるさと文化会館“ございんホール”>

⇒ 5年生が、総合的な学習の時間で実践した米作りをかべ新聞にまとめたものが、農
 林中央金庫仙台支店支店長賞を受賞 ≪表彰と発表≫

3 H29.3.12(日) 仙台市・東北大学災害科学国際研究所主催
 「仙台防災未来フォーラム 2017」<於・仙台市国際センター>

⇒ 前掲1の6年生による実践発表が評価され、代表として参加し好評を博す。

(2) 活動時間について(下記から選択して下さい。)

- 通常の授業時間を使用(総合的な学習の時間を含む)
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他()